

たとえば、資本家階級による社会の管理の失敗についてのきびしい指摘は、ルポルタージュの先駆けとなった『どん底の人々』(一九〇三)でも取りあげられている。穴居人と百年前当時の米国社会の対比などは、ひじょうに興味深く、説得力もある。また、新聞や雑誌記事から引用された悲惨な現実の数々はどれも、読む者の心に突き刺さってくるような迫力を備えている。さらには、各国の同志の総数(七百万)や各国の社会主義者の得票数の増え方を、これでもかこれでもかと言わんばかりに数字でまくし立てる手法は、支配者階級を震えあがらせる告発になっている。最後に、幼年労働の残酷な実態報告は、優れた短篇「背信者」のジョニーその他を彷彿させる、等々である。

「革命」は、ロンドンの信念なり思想がほとんど抑制されることなくストレートに口にされたり筆にされた、いわば糾弾とも言つべき形をとったために、当時の社会から多大なる非難を浴びもしたが、今日のわれわれがじっくりと読みかえしてみると、単に一笑に付してしまえる程度のものにすぎないであろうか。不況やリストラ、デフレ、高い失業率に喘ぐバブル崩壊後の現代日本、それに、「恐竜が大きくなりすぎて滅亡したように、あるいはローマ帝国がそうであつたように、帝国が強大化して頂点にのぼりつめたちようどその時に、崩壊のプロセスが始まる」と喩えられる現代アメリカそのものに対する百年前からのメッセージないし警告と読めないだろうか。同じアメリカの、しかもロンドンから百年を経た今日、「所得格差が一九二〇年代来の高いレベルに広がって……(中略)……所得最下層二〇パーセントの世帯の実質所得は、実に九パーセントもの落ち込みを記録した。一方、最富裕層一パーセントは一二五パーセントもの所得増加を経験している。たとえば、一九八一年から二〇〇〇年までの二〇年間に、全米トップテン企業の社長の報酬は三五〇万ドルから一億五四〇万ドルへと四四倍も膨らんでいる……(中略)……いまの米国は明らかに病んでいる⁵⁾」という実態を知ったら、ロンドンはどうな反応を示すだろうか。こうした弱者切り捨て政策を俎上にのぼさずにはいまい。

注

- 1) Russ Kingman, *A Pictorial Life of Jack London* (New York: Crown Publishers, 1979), p. 141. 邦訳は、拙訳書『地球を駆けぬけたカリフォルニア作家』(本の友社 一九八九) 二五九頁。
- 2) *Ibid.*, p. 144. 邦訳は、同右、二六四頁。
- 3) *Ibid.*, p. 144. 邦訳は、同右、二六五頁。
- 4) アンドリュー・デウィット/金子勝『反ブッシュイズム』(岩波書店「岩波ブックレット」No. 五八七、二〇〇三) 一一頁。
- 5) 同右、五九―六〇頁。

おかげで、ロンドンの知られざる多くの部分が本邦初訳も含めて広く知られるようになり、読者の反響も得ている。何といっても冊数にして五十三冊もの著書を残した多作家であり、その内訳を見ても小説が二十二冊、短篇集が十九冊にも及んでいる。筆者も、秀作・佳作と目されている作品にあたり、翻訳し、読み解いてきた。したがって、その作業たるや遅々たる歩みであり、短篇だけでも十九冊に収録されているもの、および収録されていないものまで含めると、実に二百篇を数えるのであるから、筆者にもロンドンの仕事のすべてを読破するのはまさに至難のわざである。

さて今回は、フィクションを離れ、ロンドンのエッセイを取りあげてみた。彼には作家としての本質に迫るうえで、フィクションに優るとも劣らぬ必須のエッセイ群があるが、この「革命」もその一つである。いわゆる「Non-Fictional Work」と呼ばれるジャンルで、このジャンルのものだけでも総計すると、実に三百二十篇に及ぶ膨大な記事、エッセイ、書評等を書き残しているのである。

「革命」というタイトルから、ただならぬ、あるいは突拍子もない内容が察知される。だが、ロンドンが生きた十九世紀末～二十世紀初頭という時代と、彼の不遇な生い立ちとを辿ってみれば、合点がいくし、逆にこの「革命」自体が彼の時代を鮮明に炙り出していると言ってもいい。

ロンドンには、かなり貧しい幼少年時代を送った。詳細はすでにある伝記や他の諸作品に譲るとして、時代も一般労働者階級を苦況に追いやっていった。とりわけ彼の多感な幼少年期には、大小の不景気が波状攻撃をかけることくアメリカ社会を襲い、無類の読書好きと各地の放浪体験とによって、社会の仕組みや貧富の差を人為的に生みだす構造を敏感にその目で見てとり、肌で感じとった。そして職業作家としてのデビュー後は、声を大にしての講演やいくつものエッセイで、胸の内にためていた考えを率直に吐露した。一九〇五年には、「革命」と題した講演だけでも全米各地で都合六回も行なっている。一九〇五年といえば、ロンドン二十九歳。作家として脂が乗り、社会主義者としても面目躍如といった時期にあたる。それだけに、「作家としての名声と社会主義の扇動者としての悪名の高さ」¹⁾が鎬を削るほどの大変な一年であった。このエッセイの発表も、*Toledo The Socialist* の一九〇五年三月十八日号であり、のちに一九〇八年一月に *Contemporary Review* にも転載されている。「革命」所収の単行書としては *Revolution and Other Essays* が一九一〇年三月に出版されている。

今日のわれわれが読んでも嘖然とさせられる内容を盛りこんでいるのだから、百年前の当時にあつては、これらの一連の講演を聴いたり、このエッセイを読んだりした一般人が受けた驚愕とショックの大きさは計り知れないものがあつただろう。ただならぬ蟬聲^{ひんせう}を折りにつけ買ったのも事実である。たしかに、激しい表現が目につく。R・キングマンは、「彼の手違いは、その独断的な提示の仕方と言葉の軽率な選択とにあり、そのために、彼が抛つて立つ労働者階級の共感どころか、かえって恐怖を招来した」と指摘する一方で、「祖国をとことん愛していたからこそ機会均等の国、すなわち富の公平な分配が認められるような国にするためにできるかぎりの尽力をした人物」とも弁護している。

なるほどセンセーショナルな文言が目立つ一方で、ロンドン文学全体の根幹をなす要素がいくつも織りこまれていることも見逃してはならない。

「革命」訳者ノート

ジャック・ロンドン(一八七六―一九一六)は、わが国では一般には長らく『野性の呼び声』と『白牙』のほとんど二作のみによって知られてきたと言つてもよい。筆者は、そうしたこれまでの扱いと評価傾向に不満の声をあげ、他の優れた作品にいくつも目を通していくうちに、発表後九十―百年を経た今日もなお十分に通用するものが相当数あることを知り、浅学非才を顧みず、研究と翻訳の二足のわらじをはいて早三十年余りが経つた最初の訳書(『ジャック・ロンドン大予言』晶文社、一九八三)が出てからでも、もう二十年になる。無論、他の人たちによる訳書も数点上梓されている。